

“遠慮”乗り越えた支援を

福祉施設職員らが被災地の高齢者支援に奔走



有志で支援を行う金井原苑の職員ら

区内片平にある社会福祉法人一廣会「金井原苑」の職員らが被災地の高齢者支援チームを結成。職務の合間を縫い、被災地との往復の日々を送っている。介護を専門分野とする彼らが現地で感じた思いを取材した。

「レクリエーションの必要性を強く感じた。被災地のお年寄りの心を聞くのは、時間がかかるけれど、効果はかなりあったと確信している」。金井原苑でレクリエーションを担当している奥山雅平(26)さんは日帰りで被災地に飛んだひとりで、歌やゲームをするうちに、高齢者たちの表情が柔らかくなるのを感じたという。

から支援チームを結成。6人1組で気仙沼市や南三陸町の避難所や介護施設を訪問している。

同苑の有志らは5月初旬

この取り組みの発案者川内潤さんは高齢者たちが見える“遠慮”に着目する。ある避難所でレクリエーション支援を終えた川内さんらは帰り際、現地の高齢者にもついていた急須をもらえないかと話しかけられたという。聞けば、飲み物はペットボトルやパックが中心で、温かいお茶が好きな時に煎られる急須が欲しいと思っていたということだった。「何か必要なものは？」と聞いても「もう十分」と返答される東北気質の高齢者もじっくり向きあうと本音が見えてくる。レクリエーションを通して、共に

体を動かし汗を流すことで、本音を聞くことができたと感じている」と川内さんは話す。思わぬ依頼に支援をさまたげる“遠慮の壁”を感じた瞬間だった。川内さんは「一人ひとりに向き合い、じっくり話を聞くこと、一人ひとりのニーズにこちら側から気がつくことの大切さを改めて感じた。怪我も病気もない高齢者ほどその傾向が強いとも感じる」と話す。川内さんらは、この“遠慮”をブローの視点で見抜き、的確な支援を行うことが大切であると考えている。

職員らは今後も月に1、2度程度の支援を行っていく方針。被災地の高齢者たちの生の声を吸い上げ、情報発信していくことで、彼らが本当に求めている支援を模索していきたいとしている。